
性別人間と食人鬼

嵐金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性別人間と食人鬼

【Nコード】

N3651BA

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

性別人間こと、安藤未来。そして、未来の秘密を知る数少ない人間、日比野綾子。

実は、綾子にも、誰にも言えない秘密があった。

性別人間シリーズ6作目。前作「性別人間と幽霊人間」を読んだ方がわかりやすいと思います。

プロローグ

この世には、世界中に、妖怪や妖精の話がいっぱいある。
地域によって、その風習や姿形は様々あるが……

俺は唯一、吸血鬼なら、その説明ができる。

人間の血を吸う鬼と書いて、吸血鬼。

魔王——カラスがいることにより、人間界にいる吸血鬼の数は増加傾向にある。

……現に、俺も一度や二度、襲われた経験がある。

だが、そんな中、俺はついに出会ってしまった。

人間を血を吸い、ましてや、肉や骨すらも食す——食人鬼に。

今回は、鬼になってしまった友人と、自らの使命と戦う鬼の話——。

異変

「綾子！！誕生日おめでとう！！」

今日、6月15日は、綾子の誕生日。

私は朝、綾子に会うなり、いつもの綾子に負けないぐらいの大声でプレゼントを渡した。

前から綾子が欲しいとボヤいていた、ヘッドフォン。多分、喜んでくれるだろう。

「未来、私の誕生日知ってたの？」

「当たり前じゃん、親友でしょ？」

綾子は、私の性別の事を知る数少ない人間であり、そのことを知ってても、私から身を引かなかった数少ない友人。

私が、クラスメイトに性別の事がバレてしまい、落ち込んでいても、真っ先に綾子が励ましてくれた。

私にとって綾子は、まさに、本当の親友と言える存在だ。

「そっか……私も、もう17か……ありがとう、未来。」

だが、その日の綾子は、どこか元気が無かった。

「綾子、今日、元気ないけど、何かあった？」

「え？……いや、別に、なんでもないよっ。」

綾子は、私が差し出したプレゼントを受け取ると、中身を確認した。

「えっと……お、これは……私が前から欲しいと思っていたヘッドフォンじゃないか！ありがとう、未来！！」

綾子の顔に笑顔が戻った。

「喜んでくれて嬉しいよ、綾子。」

でも、私は見逃さなかった。……綾子は、作り笑いをしていた。一体どうしたというのだろうか？

「日比野さん、誕生日おめでとございます!」

直後、夏子が綾子に紙袋を渡してきた。

「夏子、ありがとう。」

綾子は作り笑いのまま、それを受け取った。——そのことに、夏子は気付いていない。

「日比野さん、確か、17歳になられたんですよね?……いいですよー、私、実は早生まれなので、まだ誕生日は先なんですよー。」

「夏子、誕生日いつなの?」

「2月です。」

「へーえ、じゃあ、私も未来も、先にお姉さんになっちゃったわけだー。」

綾子は面白そうにくしゃくしゃと夏子の頭を混ぜた。……夏子の身長は私と綾子よりも若干低いため、十分すぎるほど絵になる。

「や、やめてくださいよ、日比野さん。」

夏子は両手で綾子の手を抑えた。

「あははっ、ごめんごめん。……さーて、夏子は何をくれたのかなー?」

綾子は紙袋の中身を確認する。

「おー、これって……マフラー?」

「これからの季節にどうかなーと……。」

「これからの季節って……これから夏だよ?」

「で、でも、あと4か月も経てば寒くなってきますし……。」

夏子なりのサプライズのようだったが、綾子にはそうは思えなかったようで……。

「あははっ、夏子、結構マジっ子なんだねー。」

「え、いや、そういうつもりじゃ……。」

夏子は”どうしよう”という感じで私を見ている。……自業自得だ、私にはどうしようもできない。

綾子はとても喜んでいた。……私だけがわかる、作り笑いで喜んで
いた。

今日の綾子は、どこか無理をしているように見えた。
何かを隠しているのだろうか？……でも、一体何を？

その日は特に何事もなく過ごせた。

そして、次の日、日比野綾子は学校を無断欠席した。

訪問

「安藤さん…日比野さん、どうして休んじやったんでしょう？…しかも、無断欠席だなんて…」

夏子のテンションは下がりがきつていた。

「だよ…綾子の家、行ってみる？」

「そうですね、行ってみましょう。何か事情があるのかもしれないし。…連絡の1つも無いなんて、おかしいですもん。」

というわけで、今、私と夏子は、綾子の家の前にいる。

綾子の家は、紅丞さんの家よりは小さいが、私の部屋よりは広い…いわば、普通の1戸建て。

古くもなく新しくもない家のインターフォンを押す。——ピンポンという音が、こちらにも聞こえた。

「……出ませんね。」

「そうだね…おかしいな、てつきり風邪かと思ったんだけど…」
「そう言いながら、何気なく、扉のノブを回す、すると——開いた。」

「……鍵かかってない…」

「え？…何かあったんでしょうか？」

「わからない、入ってみよう。」

綾子の安否が急に心配になった。

私と夏子は部屋に入り、真っ先にリビングに向かった——部屋の構造は、私が知っていたので、すぐにリビングにたどり着いた。

中の光景は、酷い状態だった。

まるで空き巣が入った後のような状態。……棚の物がすべて散乱し、

部屋の隅には割れた皿の破片が散らばっていた。

「な、なんですか、これ…一体、何が…。」

夏子はあまりの光景に言葉を無くしていた。

「……夏子、綾子の部屋に行くよ!」

途端に、綾子が心配になり、私は綾子の部屋に走った。

部屋の前にたどり着き、扉を開けようと手を伸ばした——その時。

ガタン!!

まるで、大きな箆笥が倒れた時のような、物凄い音、そして――

「うわあああああつ!!!!」

綾子の、叫び声が聞こえた。

「綾子!! どうしたの!? 綾子!!」

「日比野さん!? どうしたんですか!?!」

事の重大さに気付いた私と夏子は、同時に扉を叩いた。
ドアノブを回すが、鍵がかかっているのか、開かない。

「夏子、ちよつと離れてて、蹴破るから!」

「えっ、でも――」

「今頃、中は大変なことになっているかもしれないでしょ!? 四の五の言つてられないよ!」

私はドアから間を置き、壁を背に、勢いをつける。そして……

「うりゃあああつ!!」

その場で横に1回転し、扉に蹴りをかました。
ガタン!! という物音と共に、扉が開いた。

中は、リビング以上に酷い状態だった。

色んなものが、原型を留めなくなっている。…見たことはないが、まるで鬼が暴れた後のような…。

カーテンが閉められており、薄暗くなっている部屋の隅で、綾子は膝を抱えてうずくまっていた。

「綾子！！」

「日比野さん！！」

私は夏子よりも先に、綾子に近付いた。

綾子は、服がボロボロになっており、腕には、無数の引っ掻き傷のようなものがついていた。

「綾子、どうしたの！？誰にやられたの！？」

綾子は震えながら私たちを見た。……目にはうつすらと涙が貯まっている。

綾子は、涙声で私たちにこう言った。

「未来…夏子…私——」

次に聞こえた言葉は、信じられない言葉だった。

「私……鬼になっちゃった……。」

言い終えると、綾子は泣き出してしまった。
鬼……って？

事情

言葉の意味が、よくわからなかった。

日比野さんは私たちを見て一言、「鬼になった」と言ったのだ。

鬼——と聞いて、思い出すのは、アルトのような吸血鬼の存在。

でも、人間が吸血鬼になるなんて話、アルトからは聞いたことが無い。……どうということだろう？

今、私の目の前では、安藤さんが必死に、泣きじゃくる日比野さんを宥めている。

私は、改めて部屋を見渡した。

——物が散乱した部屋、原型を留めなくなった物たち……あの中に、昨日私たちが上げたプレゼントが混じっていると、考えたくもないが、今はそんなことも言ってられないのだろう。

今考えるべきは……日比野さんの状態だ。

「日比野さん、鬼って、どういうことですか？」

日比野さんは、安藤さんに縋り付きながら泣きじゃくっている。…

…そんなときに聞く私もどうかと思うが。

「夏子、ちょっと待ってあげて。綾子がまだ泣き止んでないから…」

案の定、安藤さんに小声でそんなことを言われてしまった。

「す、すみません…」

5分後、日比野さんはようやく泣き止んだ。

「綾子、大丈夫？」

「……大丈夫…。」

日比野さんは、嗚咽混じりではあるものの、受け答えはできるようだった。

「それで、その……綾子、鬼って、どういうこと？…吸血鬼、ってこと？」

私が聞こうと思っていた質問を、安藤さんが聞いた。

「違う……鬼って言うのは…吸血鬼の事じゃなくて……その……食人鬼の事なの……。」

信じられない言葉が耳に入ってきた。

——食人鬼。人を、喰う鬼。

「食人鬼って……！？どういうこと！？」

驚いた安藤さんが再度質問をする。

「っ……私、生まれたばかりの頃、悪魔に、襲われたことがあって……その時に、鬼の魂を…身体に…植えつけられたの……。」

日比野さんは、嗚咽混じりの中、淡々と答えを返してくれた。

「悪魔に……襲われた？」

「うん……生まれた日の夜、寝ているときに、悪魔が来て……それで……17歳になったら、鬼が、身体を乗っ取るって……。」

何を言っているのか、私には理解できなかった。

……悪魔の存在は、安藤さんから聞いたことがあるので、信じていないわけではない。だが、その悪魔が、なぜ日比野さんに……？

「……未来、私、どうしよう……。」

日比野さんは目から大粒の涙を流しながら安藤さんにすがった。

「落ち着いて、綾子。……じゃあ、この部屋の状態は、綾子の中にいる鬼がやっただってこと？」

安藤さんは理解が早いらしく、自分なりの解釈で話を進めた。

「うん……昨日の夜、鬼が、私の中で暴れだして……抑えることができなくて……それで……ぐすっ……。」

日比野さんはまた泣き出してしまった。

「ちょ、ちょっと待って下さい、安藤さん。私にもわかるように説明してくださいよ。」

安藤さんは日比野さんを宥めながら、私に説明してくれた。

「えっと……綾子は、生まれた日の夜に、悪魔に襲われて、身体に食人鬼の魂を植えつけられたの。それで、その鬼が昨日の夜、綾子の中で暴れだして、こんな状態になっちゃったの。……そうだね？綾子。」

安藤さんに宥められながら小さく頷いた。

「で、でも、なんで日比野さんは、悪魔に襲われたんですか？」

「それはさすがに解らない……綾子、何かわかる？」
首を横に振った。

「解らないっ……でも、次、鬼が暴れだしたら、もしかしたら、未来たちを、襲うかもしれないっ……。」

日比野さんは、安藤さんから離れた。

「だからさ……未来、夏子、今日はもう帰って……私、未来たちを襲いたくないからさ……。」

そして、引きつったような作り笑顔でそう言った。

……そんなこと、安藤さんが許すわけなかった。

「……なにそれ。」

安藤さんの声のトーンが下がった。

安藤さんは日比野さんの両肩を掴み、自分の方に向けさせた。

「ふざけないでよ！！襲うかもしれないから帰れって！？聞いたことないよそんなの！！大体、ここまで話しておいて、これ以上深入りするなってどういうことよ！！！」

安藤さんは叫んだ。日比野さんは目を丸くしていた。

「未来っ……でも、私、鬼になっちゃったんだよ？…人間じゃないんだよ…？」

「私だつて、完璧な人間じゃないよ！！……この世に、完璧な人間なんていないんだよっ…。」

安藤さんの目には、うつすらと涙が貯まっていた。

「未来…でも……。」

その時、

「うつ……！？」

日比野さんが突如、胸を抑えて俯いた。

「あ、綾子、どうしたの！？綾子！？」

「……来る…鬼が、来る…私から、離れて…早くっ…。」

震えた声で答えた。

そして――

「うわああああああっ！！！！！！」

日比野さんは突如叫びだし、目の前にいる安藤さんに掴みかかった。

食人鬼

綾子は、叫びながら私に掴みかかって来た。

「っ！？」

咄嗟の対応ができず、後ろに倒れ、押し倒される形になる。

「日比野さん！？」

夏子は目の前の状況が把握できないらしく、茫然としていた。

「あ……綾子…っ。」

綾子は私の首を絞めながら何かを呟いていた。

”人間の肉が……欲しい……”…そう呟いているように見えた。

確信した。今、私を襲っているのは、綾子ではなく、鬼——食人鬼なのだろう。

……ならば、手加減する必要はない。

私は鬼の両手を掴み、渾身の力で引きはがした。……もともと力のない綾子の腕だ、鬼とはいえ、私を取り押さえるなんて、100年早い。こう見えても力には自信がある。

「うりゃあああっ！！」

自分の両足で鬼の両足を持ち上げ、見事な巴投げを決めてやった。

鬼は、沈黙した。

巴投げを決めた際に、散乱している物で腰を強打したらしく、悶絶したまま動かなくなってしまった。

……つか、私、中学時代は空手習ってたから、体力には自信あるけど、こつも見事に巴投げが決まるなんて思ってたなかった。…巴投げって、柔道の技だね？

「あ、安藤さん、大丈夫ですか…？」

「うん、大丈夫。それよりも……。」

私は目の前に転がっている鬼に近付いた。

顔が、いつもの綾子よりも青白かった。そして、決定的な物が1つ。

「夏子、これって……。」

夏子を呼んで確かめさせる。

「安藤さん、これって……」角「…ですよね？」

「角」…だよね？」

まるで本物の鬼のような、長さ5センチほどの小さな丸い角が2本、綾子の頭から生えていた。

一見、シルエットにしてみると、猫耳にも見えるほどの可愛い小さい角……綾子は本当に、鬼になってしまった…。

「綾子……。」

すると――

「んう……。」

綾子――ではなく、鬼が、目を覚ました。

「痛い……まったく、なんて人間だ…いきなり攻撃をするなんて…。」

鬼は、腰を抑えながら起き上った。その声は、綾子の声ではあるものの、トーンが違った。

「……日比野さん？」

夏子は、恐る恐る鬼に話しかけた。

「うん？」

鬼はこちらを振り向いた。…目が、赤かった。

「……なんだ？お前達、人間の癖に…私が怖くないのか？」

鬼は睨みながらそう言った。……かなり、古風な言い方だった。

「……いや、腰を抑えながら言われても、怖いとも思わないし…。」

「…まあいい。私は今、腹が減っている。その娘、私に喰われる。」

そう言いながら、鬼は私を指さした。

「え？…わ、私？」

「そうだ。お前しかいないだろう、隣の娘でも構わないが……お前の方が胸もあるし、身長もある。…きつと食べがいがあるだろう。」

胸の事は出来れば触れてほしくなかった。……グレイもそうだが、夏子も結構胸の事を気にするタイプなのだ。

「……胸の事は、触れないで下さい……。」

夏子は寂しそうに呟いた。

「胸を気にして何が悪い、貧乳は食べがいが無いと言っただけだ。」
鬼はそう断言した。

「っ……酷い……。」

夏子は顔を抑えて泣き出してしまった。

「夏子…泣かないで、夏子。」

私は咄嗟に夏子を宥める。

夏子は泣きながら鬼に質問した。

「…あなたは何者なんですか？…どうして、日比野さんの身体にいるんですか？」

「……人間に答える義務などない。どうせ私に喰われる運命なのだからな。」

「じゃあ、喰われる前に教えてくれても、いいでしょう？…冥土の土産ってことで……。」

夏子もなかなか的確な事を言うなあ…。少し感心した。

「む……それもそうだな……。」

鬼は静かに語りだした。

「今から約17年前、1人の人間の娘が誕生した。

同じころ、別の場所で、私は、1匹の悪魔に身体を消され、魂だけの存在になった。

その日の夜、その悪魔が娘のところに行き、私の魂を、その娘の身

体に植えつけた。

……私は、彷徨った。外に出たくて、自分の身体が欲しくて、娘の身体を延々と彷徨った。……10年ほど経ったか、ようやくたどり着いたのが、娘の、”記憶”だった。

私は咄嗟に、娘に夢を見せた。……自分の身体に、私という食人鬼の魂が植えつけられるまでの、記憶を見せたのだ。

そして、最後に付け加えた。”7年後、私は覚醒する。……お前の身体を利用して、食人鬼として覚醒する。”と。

そして、7年後である昨日の夜、私は覚醒したのだ。……食人鬼としてな。……納得したか？」

私と夏子は、黙って鬼の話を聞いていた。

……聞けば聞くほど、信じられなかった。だって、綾子はそんなこと、一言も言っていなかったのだから。

「……どうして、7年後に覚醒するって言ったの？」

「それほどの歳月が無ければ力が貯まらなかったからだ。……さあ、もう良いだろう、大人しく喰われる。」

「……嫌だ。」

「何？」

「喰われろって言われて、そう簡単に喰われるわけないでしょ。」

鬼の目の色が変わった。

「……貴様、約束を破るつもりか？」

「約束も何も、”喰われてやる”なんて一言も言っていないでしょ？」
さつきから鬼とずっと対峙している私を見て、夏子は不安でいっぱいだったようで……

「あ、安藤さん、大丈夫なんですか？そんな、挑発するようなこと言ってる……。」

夏子が恐る恐る話しかける。

「そうだぞ？あまり私を怒らせない方が身のためだぞ。」

この鬼、便乗しだした……。

「……じゃあ聞くけど、なんであんたは私を襲わないの？お腹すいてるんでしょ？」

「…それは、私の中にいる主あるじが、お前を襲わないでくれと言っているからだ。」

「主って……綾子の事？」

「ああ。先ほど、完全に意識を乗っ取ったつもりだったのだが、なぜか意識が残っていたらしい。」

「じゃあ今、私たちの会話を、綾子は聞いていたわけか…」

「じゃあ、綾子を出してよ。ていうか、綾子の身体から出て行つてよ。」

そう言った途端、鬼の表情が暗くなった。

「……私も、できることならそうしたい。でも、それができないんだ。この身体に魂を植えつけられてから、必死にもがいて出口を探した…でも、見つからなかった…。」

鬼は、俯いてしまった。

「…憎い、私をこの身体に閉じ込めた、あの悪魔が憎い……もう、私はこの身体から出ることはできないのだ…。」

声が涙声になっている。…こっそり顔を覗くと、涙を流していた。

「主には、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだった……。」

「……本当に、申し訳ないと思ってる？」

「なんだと…？」

「本当に申し訳ないと思ってるなら、どうして覚醒なんかしたの？申し訳ないと思うなら、覚醒なんてしなくても——」

「解ったような口を聞くなっ…！」

水を打ったように、辺りが静かになった。

「貴様に…貴様に、何が解る！！私は、覚醒したくて覚醒したわけではない！！あのままでは、私の魂はいずれこの身体の中で消滅し

てしまう、それは嫌だった、だから覚醒せざるを得なかったのだ！
！」

言い終えると、鬼はいきなり私に掴みかかった。

「っ！？」

思わず怯んでしまった。

鬼は、先ほどのような失態をしないように、がっちりと両手で、全体重を掛けて私の腕を抑えた。

「あ、安藤さんっ！？」

夏子は怯えて鬼に近付けない様子だった。

「……もう、限界だ。お前を喰う。」

鬼の、燃えるような赤い目が、私を捕えた。

その時――

「うつ……。」

鬼が、私の手を離し、代わりに自分の頭を抑えて悶え始めた。
な……何が起きてるんだ？

「っ……主、申し訳ない……喰わないから、許してほしい……。」

――綾子だ。鬼の中にいる綾子が、必死に鬼を止めてくれているんだ。

「うつ……うわあああっ！！！」

鬼は叫び、その場に倒れてしまった。

「ひ、日比野さん！？」

夏子が声を上げる。私はゆっくりと身を起こし、鬼に近付いた。
角が消えている、顔色もいつもの綾子に戻ってる、ってことは……。

「うつ……み、未来？」

「綾子、大丈夫!？」

「日比野さん、大丈夫ですか!？」

「平気……それよりも、ごめんね……鬼が出てきちゃって……。」

綾子はいつも以上に疲れた顔をしていた。

これからの事

今、私たちはリビングにいる。

綾子の中にいる鬼は、あれ以来、音沙汰無し。

綾子が、ボロボロになった服を着替えてる間、ほんの少し、散らかったものを片付けて、私たちはソファに座った。

「……未来、夏子…私、これからどうしたらいいのかな…。」

綾子の表情は、ずっと暗いままだった。

「今は、まだ鬼が大人しいからまだいいけど、次出てきたら、もしかしたら、私の両親も食べてしまいかもしれないし…どうしたらいいんだろ…？」

「……………」

何も、言えない。

そもそも、なんで私に、鬼の魂を宿していることを黙っていたのだろう？ 私は、ちゃんと綾子に、自分の性別の事を明かしたのに…どうして？

「……日比野さん、1つ、答えてくれませんか？ どうして、安藤さんに、鬼の事を黙っていたんですか？」

夏子が、私の今一番気になっていることを聞いた。

「安藤さんも、私も、日比野さんに自分の身体の事を、ちゃんと話したんですよ？なのにどうして、自分の身体の事は話してくれなかったんですか？」

「それは、その……遠ざけられると思ったから…。」

「遠ざけられる…って？」

「だって、私、人を喰うんだよ？……性別が変わるとか、魂が身体から抜けるとか、そんなんじゃないんだよ？」

「でも、それは日比野さんの意志ではない…そうですね？」

「そうだけど……………」

「だったら話は別です。日比野さんの意志で人を喰うのであれば、私たちはあなたを遠ざけたかもしれませんが。でも、実際は日比野さんの意志ではなかった。…遠ざける必要がありません。」

夏子はまるで、いつかの私のような、そんな口調だった。

「夏子……。」

「私も、夏子の意見に同意だよ。綾子を遠ざけるなんて、考えたくない。」

「未来……ありがとう。」

綾子は、少し寂しそうに笑った。

「それで、これからの事なんですが……。」

夏子は少し気まずそうに切り出した。

「…これからの事なら、1つ提案がある。」

「提案……ですか？」

「うん。とりあえず綾子には、1度、マンションの方の私の家に来てもらおう。」

その言葉に、綾子が反応した。

「未来の家に？佐川先輩の家じゃなくて？」

「あー…実はね、紅丞先輩の家、今、両親帰ってきてるんだよね…。」

「

まあその辺の話はそのうち。だから今、マンションの方の家には暁文がいる。

「だから未来の家か…どうして？」

「会わせたいヤツがいるんだ。」

「もしかして……暁文君？」

「うん。何かわかるかもしれないし。…わからなくても、ここにいるよりはマシだと思う。」

物が散乱し、散らかりきったリビング……見てるだけで、気分が重くなる。

「……わかった。でも、部屋、どうしよう…昨日は、親が仕事で帰ってこなかったから、部屋を荒らしているところは見られなかったけど、この状況……。」

…自分の子供が誕生日なのに、仕事優先なんて、どんな親なんだろう…と思ったが、ここで、夏子が口を挟んだ。

「安藤さんの家に出かけて行って、その間に空き巣に入られた、つて言えば、大丈夫じゃないでしょうか？」

……多少無理があるが、黙って出ていくよりはマシだろう。

「それじゃ、綾子。」

「うん。」

「安藤さん、私もついて行っていいですか？」

「大丈夫だよ、行こう。」

私たちは、綾子の家を出た。

肉食

「……というわけなんだけど、何かわかるかな？」

夏子と綾子を寝室に通し、私はリビングで晁文に事情を説明してた。

「食人鬼……か。未来はそいつと話をしたのか？」

「うん。」

「怖くなかったのか？」

「怖く、なかった……って？」

「食人鬼は、本来は吸血鬼をも凌駕するほどの強さを持つ。だから、吸血鬼は皆、食人鬼を恐れて、普段なら近付くことはおろか、話す事すらしない。」

「それが、どうしたの？」

「未来の身体には、ほんの少しだが、俺や 그레이 の血が流れている。

……怖くなかったのか？」

「いや、全然……そんなこと、考えもしなかったから、解らない。」

「そうか……それにしても、食人鬼か……久しぶりに聞いた名だな……。」

「

「久しぶり」って、どういうこと？」

「食人鬼は、今となってはもう絶滅危惧種みたいなもんだ。……それがまさか、綾子の身体にいるなんてな。」

「絶滅危惧種……数が少ないってこと？」

「ああ。解ってるだけでも、100人いるかいらないか……だな。」

「そんなに少なくなっているのか……意外だ。」

「……それで、何か、解るかな？」

「何かって？」

「その……食人鬼を抑える方法……っていうのかな。」

「……さつきも言ったが、食人鬼は絶滅危惧種だ。しかも、実態がまだ明らかになっていない。抑える方法なんて、俺には解らない。」

「そっか……ごめんね、連れてきちゃって……吸血鬼が、食人鬼を恐

れてるなんて、考えてなかった…。」

「別に、平気だ。それよりも、気をつけろよ。」

「それ、どういうこと？」

「食人鬼は、文字通り人を喰うんだ。……気をつけろよ。」

「うん、解った。ありがとう。」

私は寢室に移動した。

綾子と夏子は、ベッドに座っていた。

「おまたせ。……綾子、大丈夫？」

綾子は、両腕を抑えながら、何かを堪えるような顔で、俯いていた。

「安藤さん、日比野さんが……。」

「綾子、どうかした？」

私は綾子に近付いた。

「……未来……また、鬼が出てきそう……。」

「綾子、耐えられる？」

「無理……かも……。」

綾子の身体は限界を超えているようだった。

「つつ……。」

綾子の身体が震えだす。

「うわあああああつ……!!」

綾子は叫びながら床に倒れた。

「日比野さん!？」

夏子が慌てて駆け寄る。

「夏子、離れて!!」

私は咄嗟に支持を出す——夏子が、綾子から離れる。

「っ……ふう……」

鬼が目覚めたようだ。

「主……なぜ素直に私に替わってくれないのだ……」

鬼はそう呟きながら起き上った。

「……いや、そりゃあ食人鬼に素直に替わる人間なんていないですよ。」

「お前、さつきから馴れ馴れしくないか？私は食人鬼なんだぞ……普通なら私を怖がるはずだろう。」

「もう慣れた。……あんたは私を喰わないって、断言できる。」

「ふん……確かに、私はお前を喰わない。だが、襲うときがある。」

……そこにいる娘も同じだ。」

鬼は夏子を見ながらそう言った。

「え……あ、はい……」

夏子は戸惑いつつも答えた。

「……それにしても、本当に鬼みたいな角があるんだね……暁文たちとは違うのか……」

「鬼のような角があるのは、食人鬼だけだ。……触ってみるか？」

「いいの？」

「ああ。」

そう言いながら、鬼は頭をこちらに向けた。私はゆっくりと手を伸ばし、角に触った。

「あれ？……意外に柔らかい。」

例えるなら、高反発の枕のような……それ位の硬さだ。

「最近では、角を骨の一部と勘違いする輩やかいらがいるが、それは違う。これは正真正銘、食人鬼の角だ。骨ではない。」

「へえ……そうなんだ。」

私はゆつくりと角から手を離した。

「あ、あの、安藤さん、大丈夫なんですか？食人鬼に触ったりして……。」

夏子は、私たちから少し距離を置いている。

「大丈夫だよ。襲うけど、喰わないって約束してくれたし。」

「そ、そうですね……。」

不安を抱える夏子に構わず、私は鬼に質問した。

「……ねえ、あなた、名前は何ていうの？」

「名前？」

「うん。いつまでも、”あんた”や”あなた”じゃ駄目な気がするからさ。」

「……名前は、忘れた。」

「忘れたの？」

「ああ。悪魔に身体を消される際に、記憶も多少消されてしまったらしくてな……自分の名前が思い出せないんだ。だから、私の名前はお前がつけてくれないか？」

「え、私が？」

「駄目か？」

「いや、駄目じゃないけど……いいの？私で。」

「どういう意味だ？」

「だって、私、ネーミングセンスがあれだし……。」

以前、綾子に、”未来のネーミングは少し雑すぎる”と言われたことがあった。……先ほど、鬼は、綾子の記憶に行ったと語っていたので、もしかしたら知っているかもしれない。

「ああ……そういえば、お前のネーミングは少し雑すぎると、主の記憶にあつたな……。」

知ってやがった……しかも、セリフをそのまま引用しやがった……。

「……まあ、それでもいいなら、名付けてやるけど？」

「頼みたいが……なぜ怒ってる？」

「…怒つてない。」

私は考えを巡らせた。

食人鬼……古風な喋り方……それじゃあ――

「……椿^{つばき}。」

「椿？」

「そう。椿つて、名前、どうかな？」

「……まあいいか。それで構わない。」

若干不満の表情を覗かせたように見えたのは気のせいだろうか。

「いやなら、変えるけど？」

「もう椿でいい。今更変えられると面倒だ。」

何が面倒なんだろう……まあいいや。

「で、椿、ちょっと質問なんだけど……。」

「なんだ？」

「綾子に替わるの、抑えることつてできないの？」

「可能だが……人の肉を喰えないとなれば、私は意地でも表に出てくるぞ。」

「てことは今、お腹が空いてるから、こっちに出てきてるってこと？」

「そうだ。…なのに、主はお前たちを喰うと言う……私にとっては非常に辛いことだ。…解るか？美味そうな飯を目の前にだされ、それを喰うと言われる……この気持ちがお前たちに解るか？」

「……………」

解る、とは、言いたくなかった。

私は食人鬼ではないので、そこまで詳しくは解らないが、想像することはできる。…確かに、美味しそうな飯を目の前に出された挙句、喰うと言われると、ちょっと辛い。

「……でも、人を喰うのは駄目だよ。だって、喰ったらその人を殺すことになるし……犯罪だから。」

「いや、別に、腕の1本や2本喰ったところで、死ぬ人間はいない

だろう？」

「出血多量で死んじゃうって!!」

「何を言っている、腕が無くとも生きている人間だって世の中にはいるのだぞ？」

「そうだけど……でも、人を喰うのは駄目だよ。何か他のもので代用できないの？」

「代用か……だが、生肉なら、基本は何でもいい。」

「そうなの？」

「本来は人間の肉なのだが……牛の肉でも代用は可能だ。」

「そっか……じゃあ、ちょっと待ってて。」

私はすぐさま寝室を出て、冷蔵庫に行き、適当に中を探り、それなりの大きさのステーキ用の生肉を持って行った。

「これで、どうかな？」

「ん……本当に持つてくるとは思わなかったな……。」

椿は肉を受けとりながら呆れたように呟いた。

「だって、椿が空腹な状態だと、綾子に替わってくれないんでしょ？」

「まあ、そうなるが……。」

椿はトレイのラップを丁寧に外した。

「あ、そうだ……お前達、後ろを向いてくれないか？」

「どうして？」

「その……私の食べ方は、少々エグイから、後ろを向いてほしいのだが……。」

「……わかった。夏子。」

私は夏子に呼びかける。

「あつ、はい。」

夏子と私は、椿に背を向けた。

……なんか後ろから、言葉では表せないような、グロテスクでエグい音が聞こえるんだけど……これ、絶対振り向いたら駄目だよな？

「……ふう、終わったぞ。」

私と夏子は同時に振り向いた。

椿は口の周りを素手で拭いながら、空^{から}のトレイを私に差し出した。私はそれを受け取る。

「……満足した？」

「一応な……でも、やはり人間の肉がいいな……。」
椿が物足りなさそうな目で私を見つめる。

「だから、駄目だって。さあ、もういいでしょ？綾子に替わってよ。」

「ああ。」

椿はふうつと、息を吐いた。

すると、椿の角がだんだん短くなって行き、最終的には見えなくなってしまう——

バタツ、と、椿は倒れてしまった。

「だ、大丈夫!？」

私は慌てて椿に駆け寄った。

「う……大丈夫……。」

椿——ではなく、綾子が目を覚ました。

「綾子、大丈夫？」

「……平気、ありがとう。」

「もしかして、椿とのやり取り、見てたの？」

「うん……見えてた。……凄いよ、未来、食人鬼と仲良くなっちゃうなんて……。」

仲良くって言うのか？あれ……。

「い、いやあ……まあね。」

正直な話、今まで散々、吸血鬼やら天使やら悪魔やらと付き合ってきたので、今更食人鬼が怖いとか思わなくなってしまった。

「……ところで、綾子。…椿の、食事の事なんだけど…」

「うん、生肉を食べれば大丈夫なんだよね？」

「多分ね。…その状態で、椿に話しかけることってできる？」

「話しかけるって……どうやって？」

「なんていうかその……念じるって言うのかな…できる？」

「ちよつと待つてて…」

綾子は念じるように目を閉じた。

数秒後――

「……ちよつとだけ会話ができるみたい。まだよくわからないけど…。」

意思疎通が図れるのはごく僅からしい。

「なんか、言つてた？」

「うーん……」腹が減った”って言つてた……。」

……肉1枚じゃ満足できないのかあいつ。

「なんか、相当空腹みたい……どうしよう？未来……。」

「どうしようつたって…本人からはほかに何か要望はあるの？」

「……わかんない。何も聞こえない……。」

「そつか…でも、とりあえずそのまま帰るのはちよつと危ないかも。今日は泊まってつてよ。」

「え、大丈夫なの？…未来が寝てる間に、椿が襲っちゃうかもしれないよ？」

「襲われても、喰われないから大丈夫。」

すると、夏子が横から口を挟んだ。

「でも、安藤さん。…今日は泊めておくとして、明日からはどうするつもりですか？」

「それなー……ちよつと知り合いに相談してみる。」

「知り合いって、誰ですか？」

「私の友人だよ。多分、食人鬼の事には詳しいと思う。…あくまで予想だけ。」

「わかりました。……すみません、日比野さん。私、もう門限近いで帰ります。ご協力できなくて申し訳ありません……。」

「あ、大丈夫大丈夫。ありがとね、夏子。」

「はい。それでは、失礼します。」

夏子はそのまま寝室を出て行った。私も送るために、綾子をおいて玄関に行く。

「……あの、安藤さん。」

「何？」

「気を付けてくださいね？相手は食人鬼なんですから……。」

「大丈夫、ありがとう。」

夏子はまだ、中学校からのイジメがトラウマで、人間不信から脱出できていない。……逃げたくなる気持ちもわかる。

「それでは、失礼します。」

夏子は一礼し、部屋を出て行った。

寝室に戻ると、綾子が少々困ったような顔でベッドに座っていた。

「綾子、どうかした？」

「うん……それがさ、私、急遽ここに来ることになっちゃったから、着替えとか何にも持ってきてないんだよね……。」

「あー、それは大丈夫。私の使つていいから。」

「本当に？ありがとう。……じゃあ、先にお風呂入っちゃってもいいかな？なんか疲れちゃって……。」

「良いよ、着替えは箆笥の中から適当に持ってつていいから。……脱衣所の場所、わかるよね？」

「うん、ありがとう。」

綾子は寝室を出て行った。

肉食（後書き）

替る時に叫ぶのを設定にしようか悩んでいます

瞬間

6月15日の夜、時間にして11時。

私は1人、来るであろうその瞬間に怯えていた。

親も仕事で、家で1人。自分の部屋のカーテンを閉め切り、部屋の隅で膝を抱えて震えていた。

——10歳の誕生日の夜に見た夢……7年後に食人鬼が覚醒する”

……それからはずっと、自分の誕生日を迎えるたびに、いつか来るであろうその瞬間が怖くて怖くてたまらなかった。

そして、11時35分42秒。その瞬間は訪れた。

身体中の血が徐々に熱くなり、脳が締め付けられるような頭痛に襲われる。

心拍数が上がり、身体が自由が利かなくなる。

「はぁ……はぁ……」

息が上がり、震えが酷くなる。

……怖い。自分が自分じゃなくなる……そんな気分。

「……助けて……誰か……」

来るわけの無い助けを必死で求める。

そして——

「うわああああああっっ！……！！」

頭痛が酷くなり、息が詰まる。……まるで、何かが身体の中を駆けまわっているような、そんな苦しみが襲ってくる。

「ああああっ……うわああああっ……!!」

もはや、自分がどんな状況に置かれているのか、理解する方が難しかった。

私は夜通し、暴れまくった。……家がめっちゃめっちゃになるまで、暴れまくった。そうでもしないと、自分の中で覚醒を図ろうとする食人鬼を抑えることができなかったから。

「……はあ……。」

風呂上がり、着替えた後、脱衣所で昨日の事を思い出して思わずため息をこぼす。

今でこそ、食人鬼——椿は、大人しくしてくれてはいるものの、次いつ暴れだすか解らない。早いうちに、未来たちから身を引いた方がいいのかもしれない。

でも、未来や夏子は、私を受け入れてくれた。”遠ざけない”と、断言してくれた。…身を引くなんてしたら、逆に怒られるかもしれない

ない。

……だったら、私自信の力で、どうにかして椿を抑えないといけない。しっかりしろ、自分。

(主……。)

「……え？」

今、誰かの声が聞こえたような…。

もしかして……椿？

(はい。やっと聞こえましたか…。)

なんだろう…身体の内側から声が響いてくる……未来の言っただ、椿と会話するって、こういうことなのかな？

だとすれば、いろいろと話を付けておく必要がある。

あなたは……食人鬼なの？

(今更何を……あなたも解っているのでしょうか？)

わ、解ってる、確認よ、確認。……それにしても、食人鬼にも感情があるんだね…。

（当たり前でしょう、吸血鬼にも感情があるのですから。）

ふーん……ねえ、1つ、頼んでも良いかな？

（はい。）

出来れば……いや、絶対、約束してほしいことがあるの。

（……何でしょう？）

今すぐここで、”何があっても、人間は食べない。”って約束して。

（……やはり、その事でしたか……主、私はこれでも、れっきとした食人鬼なのですよ？そんな私に、”人を食うな”とは……無理難題を押し付けないでもらいたいものです。）

で、でも、人を食べるなんて、非常識だし――

（ならば、主。もしもあなたが”非常識だから、牛や豚などの肉の類は食べるな”と言われたら、どうなさるおつもりですか？）

そ、そりゃあ、別の食べ物を食べるしか……。

（確かに、人間ならそうなさるでしょうね。

……ですが、私は食人鬼。主に人しか食べることが出来ません。先ほど、牛の肉を食べはしたものの、あれは人間で言う”安上がりなスナック菓子”程度にしかありません。食べ続けても栄養は溜まらず、寧ろ身体に毒です。だから私は人を食べなければならない。

……納得していただけましたか？）

……。

椿の言っていることは、見方を変えれば正論と言える。が、それはあくまで”見方を変えれば”の話だ。

直球で捕らえれば、椿のやってることは、”巧みに話術を駆使し、自分の欲望のために無理に話を押し通そうとしている”ようにしか思えない。

そんな奴のために立ち上がり、自らを犠牲にしてまで助けようとする奴なんているわけ無い。

——人間は、そこまで精密に出来ていないのだ。

むしろ、そこら辺で飼われてる犬や猫の方が、より精密に出来ているに決まっている。

もちろん、私も人間であるから、約10行前の言葉に反しているわけじゃない。
だから——

……ごめん、椿。私、その事には納得できない。

（主…。）

そちらの事情はどうであれ、あなたの身体は今、私なわけだからさ……私、生肉はギリいけても、さすがに人は無理だよ。

（……解りました。）

その言葉を最後に、椿の声は聞こえなくなってしまった。

それと同じタイミングで、脱衣所の扉が開き、未来が入ってきた。

未来の性別は、女から男に変わっていた。——どうやら、私が入浴中に暁文君に血をあげたらしい。……見たかった…。

「お、もう着替えてたか。遅かったから心配したよ。」

「あつ、ごめんごめん。髪、自然乾燥してたー。」

わざとらしく頭の上にバスタオルを乗せてアピールする。

「タオル乗つけてたら乾かないだろ？……にしても、パジャマがピツタリでよかったな。」

未来が私を見ながらそう呟いた。

「うん。未来と身長同じでよかったよ。」

何とか話を合わせ、私と未来は寝室を出た。

就寝

「綾子、今日は一緒に寝るか？」

そんな一言から、始まった。

「……は？」

「いや、だから……リビングには暁文がいるし、両親の部屋は使えないから、一緒に寝るか？って……。」

いやいやいや。

何言ってるのこの人。

「……はあ。未来、私、鬼になっちゃったんだよ？人を食べるんだよ？そんな私と普通寝る？」

「え、嫌なのか？」

「嫌って言つか——」

嫌って言つか、むしろかつこよくて少し童顔っぽい男バージヨンの未来と一緒に寝られるんならこんな嬉しいことは……何言ってるんだ私。

「……私は構わないんだけど、逆に未来が危険に晒されるかもしれないんだよ。」

「ああ……安心しろ。こっちには秘策がある。」

「秘策？」

「そう。……だから、心配すんな。」

未来はそう言いながら、私の肩にポンと手を乗せた。

——ドクンッ

身体が、椿が、未来に反応している。心臓が熱い。

「……わ、解った。じゃあ、ベッドの隣に別の布団持ってこないと……。」

未来の手を軽く払いのけながら、私は呟いた。

「え？……いや、1つのベッドで一緒に寝るんだけど……。」

「……え？」

「え？」

「いや、”え？”じゃなくて。……え？」

なんかこれじゃあ私が必死に”え？”の言い方を教えてるみたいじゃないか。違う違う。

「えっと……いいの？私なんかと一緒に……。」

「いや、だから言っただろ？俺には秘策があるって。」

「うーん……そうは言っけど……。」

どうするべきか。

「……もう悩んでる暇なんて無いよ。ほら。」

そう言いながら、未来は布団に潜り込んだ。

……まあ、いざという時は、ベッドから転げ落ちたりして逃げればいいか。

別に、男の未来とは、1年の時もお泊まり会（2人きりの）で一緒に寝たことあるから抵抗は無い。……ツッコミは受け付けない。

「よいしょっ。」

私も布団に潜り込む。

未来のベッドは普通のベッドよりも大きいので、2人入ってもくつつく事はない。

「おやすみ、綾子。」

「うん。おやすみ、未来。」

危機

朝。

私はいつも、目覚まし時計によって目を覚ます。どこかに泊まってるときは誰かに起こしてもらってる。

本日も、例によって例のごとく、起こしてもらって目が覚めた。

——のだが、その起こした人物、及びその起こし方ときたら……。

まあ、簡単に言えば、”未来と一緒にいることに堪えられなくなつた椿が無理矢理、私と替わろうとして暴れてる”だけの話なのだが、私にとってそれは”危機”以外の何物でもなかった。

「……はあ……はあっ……。」

突如、息が苦しくなり、意識が覚醒する。
心臓が鼓動を速め、身体中の血が疼く。

「——綾子！？大丈夫か！？」

異変に気付いて起きた未来が私に近付く。

——このままじゃあ、まずい。

「……だめっ……椿、やめて……。」

胸を抑えながら、かすれた声で呟くが、恐らく届いてはいないだろう。

「……うわああああああっ!!」

突如、身体が自由が無くなり、主導権を奪われたことに気付く。椿はそのまま未来をベッドの外に突き飛ばすように押し倒した。

「はあ……はあっ……食人鬼の隣で堂々と居眠りとは……無謀なことこの上ないな……。」

椿は未来の肩を抑えつけ、息を切らしながらそう言った。

「……息切らせながら言われても、怖くも何ともないんだが……。」

未来は何故か食人鬼を挑発するようなことを言っている。

「ふん……貴様、調子に乗ってられるのも今のうちだぞ?」

「へえ……?俺としては、早く綾子に変わってほしいんだがなあ?」

「貴様あつ……。」

椿が肩を掴む手の力を強めるが、未来は一切動じない。

「……それよりも、椿。いいのか?無理矢理替わっちまって。主様に怒られるんじゃないの?」

「……!」

未来の言葉に、椿が反応した。

「そ、それは——」

「解ったら早く退けろ。お前は綾子には逆らえないはずだ。」
「……。」

椿はゆっくりと未来から離れた。

「…貴様、確か昨日、”秘策がある”とか言ったな…まさか、これの事か？」

椿の言葉に、未来は起き上がり、小さく頷いた。

「椿は綾子の言葉には逆らえないはずだと思って。」

「……逆らえなくとも、無理矢理表に出ることぐらいできる。」

「ふーん？…でもさ、勝手に替われちゃあ迷惑だよなあ？綾子。」

…え？今の、私に言ったの？

「……………」

椿は俯き、何も言わない。

「…はあ……とりあえずそこで待ってる。なんか持ってくるから。」

そう言うのと、未来は寢室を出て行ってしまった。

（……なんか、怒ってませんでした？）

そりゃあ、未来は朝弱いからね……寝起きは結構不機嫌だったりする時がたまにあるのよ。

（そうなんですか……。）

椿はベッドに腰掛け、膝の上で拳を作って俯いている。

……未来が怖い？

（…少しだけです。）

私も、たまに男の未来が怖いと思う時あるからね……。

（ああ、なるほど…そう言うことですか。）
どうかしたの？

（”主が怖いと思ったものは、私も怖いと思ってしまう”とだけ言
っておきます。）

てことは、今、椿は未来が怖いのは、私の所為ってこと？

（聞こえは悪いですが、そう言うことになります。）

……てかき、椿。なんで私には敬語なの？

（そりゃあ、この身体は”元々”主の物ですから、敬語になるのは
当然でしょう。）

元々って……今も私の物だよ……！！

（っ……怒鳴らないでください…頭に響きますから…。）

椿はわざとらしく頭を抑えている。

その時、ガチャッと扉が開き、未来が入ってきた。——性別が変わ
つてるところを見ると、暁文君に血をあげてきたらしい。

「なんだ、綾子に替わってないんだ？」

未来は椿をじつと見つめている。

「……今、腹が減ってるから…そう言うわけには行かない。」

「ふーん……じゃあ、これ。」

未来はそう言いながらステーキ肉が入ったトレイを差し出した。

椿はそれを無言で受け取り、丁寧にビニールを外していく。

そうしてる間に、未来が椿に背を向けた。

（今のうちに襲って食ってしまえば——）
ダメっ……！！

（っ……わかりましたよ…。）

椿は右手で肉を持ち上げると、真上を向き、口をあーんと大きく開

け、肉を口に放り込み、咀嚼した。

はしたない……。

（食人鬼は皆こうですよ。）

「……終わったぞ。」

肉の塊を嚥下した椿は、口を素手で拭いながら未来を呼んだ。

「……さあ、早く綾子に替わって。」

未来は椿からトレイを受け取りながらそう言った。

「……………」

椿は無言で意識を集中させる――

突如、意識が引つ張られ、身体の主導権が戻った。

「綾子、大丈夫？」

「大丈夫……平気。」

「……よかった。立てる？朝ご飯食べようと思ったんだけど……。」

「それが、さ……私、今でお腹いっぱいになっちゃったみたいなの。」

「

「え、どういうこと？」

「なんかさ……私の身体、中身の方は完全に食人鬼になっちゃってるみたいで……生肉とか受け入れちゃってるみたいなの。」

「そうなの？」

未来の表情が暗くなった。

「うん。……ほら、椿が出て私が出て、身体は1つしかないから、そこら辺も同じになってる……みたいなの？」

おどけて笑ってみせるが、未来の表情は暗くなる一方だった。

「……綾子。」

未来が真剣な表情で私を呼んだ。

「な、何？」

「とりあえず今日、グレイを呼んで、これからのことについて話したいと思う。」

「グレイちゃんを?...何で?」

「それがさ.....綾子、”悪魔”って信じる?」

——ドクンッ

”悪魔”、その言葉を聞いた瞬間、心臓が大きく脈打った。

(あ.....悪魔って...)

椿が反応してる。半ば、怯えているようにも思える。

「綾子?どうかした?」

「ご、ごめん、なんか、椿が怯えているみたいで.....」

「椿が?...ああ、そういえば、悪魔に身体を消されたんだっけ...

.....でも、椿には少し酷かもしれないけど、今日はその悪魔に会ってもらわなきゃいけないかもしれない。」

「えっ.....どういうこと?」

「ちょっと話が長くなるんだけど——」

未来は簡潔に、わかりやすく、”悪魔とは何か”を私に説明してくれた。

「——というわけなんだけど.....解った?」

「えっと……つまり、今、 그레이ちゃんの羽には、その悪魔がいるってこと？」

「そう。で、その悪魔って言うのが、普通の悪魔じゃなくて、なんというか……悪魔の王なのよ。」

「悪魔の王って……まさか、魔王!？」

私の言葉に、未来は小さく頷いた。

——その間、椿はビクビクしながらその話を聞いていた。身体を消されたことがトラウマなのか、かなりテンションが下がっているようだった。

(あ……主……)

椿、どうかした？

(本当に、その魔王に会うのですか?)

成り行き上そうなるみたいだけど……怖いの？

(そりゃあ……それなりに……)

「……未来。」

「何？」

「なんか、椿が悪魔と会うのを怖がってるみたいなんだけど……。椿には気付かれぬように目で合図を送る。」

「……へえー。食人鬼にも怖いと思うことがあるんだあー……。未来がジト目で私を見る。」

(……主……)

何？

（会いましょう、その魔王とやらに。）

え、でも、怖くないの？

（私が魔王を怖がるわけ無いでしょう？）

そう？ならいいけど……。

作戦成功。未来に目で伝える。

「それじゃ、しばらくそこで待っててね。」

そう言っと、寢室を出て行ってしまった。

危機（後書き）

嚙下をずっとト力って読んでました。……エンカですよね、なんか悔しい。

親友

「グレイ、おまたせ。」

リビングでは、既に家に呼んでおいていたグレイがスタンバイしていた……というか、ソファの上で瞳を綺麗なピンク色にして暁文にくっついてイチヤイチャしていた。

……なんか、見ててムカつく。

「はいはい……もうお終い。」

暁文からグレイを引き剥がす。

「嫌っ、もう少しだけえー。」

「散々時間あげたでしょ、ほらっ。」

「やあ〜ん。」

なかなか離れない……。

「おい、未来。」

突如、暁文が声をかけてきた。

「な、何？」

「別に、くっついてたっていいだろ。……もしかして、妬いてんのか？」

「まさかあっ……はあ…解ったよ、好きにな。」

仕方なくグレイから手を離す。

グレイは再び暁文にくっつき、瞳をピンク色にしてイチヤイチャし始めた。腹立つ。こっちだって我慢してんのに。

「……………とにかく、綾子のことは、さっき話したよね？」

「うん…驚いたよ、まさか綾子ちゃんが食人鬼だなんて……。」

グレイは暁文の膝の上に座って答えた。

「覚醒したのは昨日なんだけどね……それで、カラスに、そのことは？」

「一応、話は聞いてたみたい。」

「そっか。何か言ってなかった？」

「特に何も……。」

「何も？本当に？」

グレイは小さく頷いた。

「そっか……おかしいなー、食人鬼がいると解ればすぐ出てくると思つたのに……。」

「もう少し待ってみてよ。もしかしたら夜になれば出てくるかもしれないし。」

「まあ、それもそうかな……じゃあ、出てきたら教えてね。」

とりあえず踵を返して寝室へと戻る。

「綾子？」

そーっと寝室の扉を開ける。

綾子はベッドには座っていないく、代わりにベッドの上に倒れるようにして眠っていた。

……そういえば、今朝は椿に叩き起こされてる感じだったからなあ、仕方ないか。

綾子に初めて会ったのは、クラスに馴染めるか不安だった高校1年生の頃。

「安藤さん！こんにちは！」

いつもと変わらぬ優しい笑顔と元気な声で話しかけてくれた。私の性別を知っても、何も言わずに受け入れてくれた。

そんな綾子が――食人鬼。

信じられなかった。いや、信じたくなかった。綾子だけは普通の間だと思っていた。

「……………」

悲しくなって、拳を握る。
気を抜けばいつだって泣くことは出来る。でもそれは絶対しては行けないことのような気がする。

「ふ……………」

深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

その瞬間。

カチャツと寝室の扉が開いた。

驚いて振り返るとそこには――カラスがいた。

魔王

「……カラス。今日はまたずいぶん来るのが遅かったね。」

「ん……天気がよかったからな……居眠りしてた。」

んなことしてる場合か。こっちは非常事態だって言うのに。

「お前等の事情なんて知らねえよ。」

あ、心を読まれた。そういえば悪魔は心が読めるんだった。

「ったく……あいつが話にでてた食人鬼か？」

カラスがベッドに寝ている綾子を見た。

「今は違うけど……うん。」

「ふーん……で、あれを俺はどうすりゃいいんだ？」

「えっと……何とかならないかな、その……食人鬼を引っ張り出すとか……。」

そう言った途端、カラスがため息をついた。

「はあ……お前さあ、俺を便利屋かなんかだと思ってねえ？こっちにだって限度があるんだよ。」

「で、でも、カラスは魔王だし……。」

「魔王でも出来ないことぐらいある。神じゃねえんだから。」

「そっか……。」

「……ただ、その食人鬼は、”身体を他の悪魔に消された”って言ったんだろ？」

「うん。」

「身体を消された……ねえ……ちょっと不透明だな。」

「どういうこと？」

「”身体を消されたって断言できるのか”って事だ。」

「？……消されてないってこと？」

「そう。相手は悪魔。物質を一時的に消えたように見せかけるのは簡単なことだ。今頃どこかでまだその身体を消滅させずに保管して

いる可能性だつてある。」

「でも、もう17年も前だし……。」

「悪魔にとつちやあ17年も一瞬も変わらねえよ。——にしても、
もしも、俺の考えがあたつていれば……少し凄いことになるかもな。」

「す、凄いことつて?」

「ん、何でもない。……なあ、未来。少し時間をくれないか?」

「え、時間?」

「そう。大体2日間。」

「2日間も?何するの?」

「それは企業秘密。んじゃ。」

カラスは部屋を出ていってしまった。

「んっ……。」

綾子が目を覚ました。

「あつ——綾子、大丈夫?」

「うん……寝ちゃつてた……。」

目を擦りながらゆっくりと身を起こす。

とりあえず、上記でのカラスとの会話を綾子に伝えた。

「……じゃあ、2日後にならなきゃ解らないってこと?」

「そう言うことになるね。」

「そうなんだ……。」

綾子は納得しつつ、おもむろに携帯を開いた。

「……あ、親から電話来てた。」

「折り返していいよ、私リビングにいるから。」
「ありがとう。」

私は綾子に背を向け、リビングへと向かった。

我慢

綾子はもう限界かもしれない。

さつきはおどけて笑ったりしていたが、明らかに表情が疲れてきている。

……そりゃあそうだ。食人鬼が覚醒して、何度も何度も入れ替わりを繰り返して、疲れない方がどうかしている。

綾子は、身体的にも精神的にも限界だろう。早めに何とか手を打たないと、命に関わるかもしれない。

……少し、自分にも制限をかけないとな。

リビングに行き、まだイチャイチャしている暁文と 그레이 を後目に、私はベランダへと向かった。

ベランダにでて、ポケットから携帯を取り出す。

慣れた手つきで電話帳を開き、”佐川紅丞”を選択する。

そのまま、紅丞さんの電話番号に掛けた。

数秒後、紅丞さんが電話に出た。

「もしもし、未来？どうした？」

「紅丞さん、こんにちば。……その、実はちょっと大事な話があるんです。」

「大事な話……って？」

「実は、その……紅丞さん、私たち、いつ頃紅丞さんの家に帰られますかね？」

「ああ、安心しろ、今日の夜に家を出るらしくて、今、準備してるから。」

「そう、ですか……。」

「どうかしたのか？」

「その…非常に言いづらいのですが……。」

私、もしかしたら、あと2日間は、紅丞さんと会えなくなるかもしれないんです。」

「えっ!!?ど、どう言うことだよ!?!」

「お、落ち着いてください……。実は、綾子にちょっとトラブルがありまして、そっちの方に行かなくてはなりません……。」

「日比野に、トラブル……なんか、珍しいな。」

「ですから、2日間は会えなくなるんです……。」

「でも、そんな大それたトラブルなら、俺も何か手伝うけど?」
言うと思った。

「いえ、わざわざ紅丞さんの手を借りる必要はありません。それよりも、ちゃんと三食、野菜食べてくださいよ? 그레이に監視させますからね?」

「えっ……解ったよ……。」

何とか話を逸らすことに成功した。

「……それでは、失礼します。」

ゆっくりと終話ボタンを押す。

……これでとりあえず、2日間の猶予は得られた。その間に何とか問題を解決しないといけない。

寝室に戻ると、綾子が既に電話を終えて待っていた。

「未来…お母さんが、帰ってこいって……。」

「そっか……それって、今すぐ？」

綾子は小さく頷いた。

…今すぐは、キツいな……。

空腹状態になった椿がどうなるか…想像するだけでも恐ろしい。

「…解った。じゃあ、送っていくよ。」

「え、でも……。」

「いいから、いいから。じゃ、行こうか。」

私は携帯と財布を持って、綾子は昨日着ていた服を着直し、家を出た。

「……ねえ、未来。」

「何？」

「本当に、いいの？」

「何が？」

「何がつて……。」

道中、綾子には元気がなかった。——当然と言えば当然だが。

「……私、いつか本当に未来を食べちゃうかもしれないのに……。」
「だから……言っただでしょ？椿は、私を襲うことはあっても、食べることはないって。さっきもそうだったし。」

「そうだけど……。」

綾子はなかなか私に目を合わせてくれない。私の斜め前をひたすら歩いている。

「…綾子、なんでこっち向いてくれないの？」

「……………」

ついには何も答えてくれなくなった。

「ねえ、綾子——！」

後ろから肩を掴んだ。

「っ——！！！」

瞬間、綾子は私の手を払いのけた。かなり強く。

「え…………？」

思わず立ち止まる。

ようやくこちらを振り向いたかと思えば、俯き、そのまま何歩か後退りしてしまった。

「…………ごめん、未来…………椿が、未来に反応してるみたいなの……。」

息が詰まっているのか、苦しそうに胸を抑えながら呟いた。

「だから……ごめんね、未来……あとは、1人で帰るから……。」

そういうと、綾子は茫然としている私に背を向けると、走って行ってしまった――。

悲

「ただいま。」

昼頃、ようやく未来が帰って来た。

リビングで待っていると、未来が入って来た。

「おかえり、未来。……腹減ったんだが。」

「うん、解ってる。」

俺は未来を取り押さえるように抱きしめ、首に齒を刺そう――

「っ……。」

――とした瞬間、すすり泣く声が聞こえた。

「……未来？」

未来は、泣いていた。俺に見られないように、顔を背けながら。

「うつ……うわああああっ……。」

俺はただ、頭を撫でながら、宥めることしかできなかった。

寂しさ

その日の夜、綾子からは何も連絡はなかった。
綾子の両親からも連絡がないところを見ると、特に異変はなかったように思える。

「はあ……。」

ベッドに座り、膝を抱える。

俺が泣き止んだ後、暁文はさっさと吸血を済ませ、しばらくの間、俺を1人にしてくれた。……優しいんだか厳しいんだか解んねえよ、もう…。

それにしても、俺が暁文の前で泣くとは思わなかったな…俺も思い詰めてたのかな…。

こんな時、あいつがいたらどうするんだろう、と思う。

あいつ……”瀬夏”だったら、どうするんだろう？
グレイの恋の時には1番役に立った瀬夏……いつ帰ってくるんだろうなー。

「……瀬夏——」

とりあえず、膝から顔を離し、大の字に寝転がる。

「……………あああああああー畜生っ！！！！！」

[illegible]

「…未来、何してんだ？」
暁文が入って来た。

「ああ！？……なんでもねえよ。」

「それならいいんだけど……腹減ったよ。」
「あー…解った。」

ゆつくりと暁文に近付く。

「…ところで未来、飯はいいのか？朝も昼も食べてないんだろ？もう夜だし…。」

「ん……食欲無い。」

「そう言っな。逆に不安だ。…ちょっと待ってろ。」

「え、あ、ちょ——」

俺が止めるのも聞かずに、暁文は寝室を出て行ってしまった。

………なんか、寂しいな、1人って。グレイはさっき帰ったし。
「こーゆー時は……。」

俺は携帯を取り出し、とりあえず電話帳を開く。

「ど・ち・ら・に・し・よ・う・か・な……こっちだ。」

番号に電話する。

数秒後、相手が出た。

「もしもし！！未来ー！」

「……相変わらずハイテンションだな……陸。」

「そりゃあ、姉から連絡来たらテンション上がるだろー。……で、要件は何？」

「要件は……無い。」

「は？」

「だから……まあ、寂しかったから電話した。」

「え！？それだけで電話したの！？……未来が寂しがるなんて……これ、雪でも降るかな？」

「お前なあ……俺だって寂しがることくらいあるっつーの。これでも一応電話する相手迷ったんだからな？二択で。」

「もう1人は誰？」

「夏子。」

「夏子って確か……あー、赤崎夏子先輩か。」

「知ってるのか？」

「そりゃまあ、未来と仲のいい人つてのは一応チェック済みだし。」

「チェックって？」

「あ、いや、な、なんでもない！！気にすんなー！！」

「いや、気になる、言え。」

「あぁー……お、俺、ちよっと急用が……。」

「陸ー？」

「………そんじゃっ。」

直後、プツンツという音がし、電話が切れた。

あの野郎……そんなストーカー紛いの事してたのか……いつかメてやる。

「未来、ちよっと来い。」

暁文が入って来た。

「…なんか、できたのか？」

「一応、余ったもので何か作った。」

暁文についていき、リビングに行くと、テーブルの上には温められた夕食が乗っかっていた。

「おお…暁文って料理できるんだな…。」

「できるんだなって、以前も食べたことあっただろ。」

「そういえばそうだったな。」

言いながら席に着く。

「…ところで暁文、どうして料理できるんだ？…吸血鬼界で教わったのか？」

「うーん…まあそう言う感じだな。」

「へー…じゃ、いただきます。」

俺は両手を合わせ、箸へと手を伸ばした。

欲求

「ごちそうさまー。」

再び両手を合わせ、食器を片付けた。

「未来ー、腹減ったよ。」

「解ったよ……ったく。」

暁文は俺に近付き、抱きしめた。

「……未来、あまり無理すんなよ。」

「別に、無理なんてしてねえよ。」

「そうか？じゃあちよつと無理な吸血してもいいんだな？」

「え？あ、いや、そう言う意味じゃ——」

「じゃ、いただきます。」

暁文は勢いよく歯を突き刺し、更に勢いよく歯を抜き、吸いついた。
「痛つ……！お前つ——。」

直後、物凄い勢いで髪が伸び、性別が切り替わった。

「ちよつ、暁文、性別変わったって、暁文……！」

背中を叩いて訴える。

「ん……解った。」

暁文は私を離れた。

「あんた……もう少し優しくしてよ……。」

「それもそうだな。以前瀬夏から怒られたし。」

「え、あんたが、瀬夏に？……情けなっ。」

「情けないとは……心外だな。」

「だって、あんたと瀬夏、10歳以上も年離れてるじゃん。」
「そう言いながら、私は玄関へと移動する。」

「そうだけど……って、未来、どこ行くんだ？」

「マンションの屋上。ちよつと風に当たってくる。」

「だったら、俺もいく。飛び降りされたら迷惑だし。」

「誰も飛び降りたりなんかしないっつーの……1人で大丈夫だから。んじゃ。」
さっさと靴を履きかえ、家を出た。

屋上到着。夜風が涼しい。

「ふー……。」

手すりに寄りかかり、景色を眺める。――夜景が綺麗だ。

「……はあ。」

駄目だ、綺麗な夜景を見てもため息が治まらない。
本当に寂しい。帰ってきてほしい。

「瀬夏ー、帰ってきてよー…。」
思わず呟いた。

その瞬間――

「僕がどうかしました?」

聞きなれた、懐かしい声が後ろから聞こえた。

歡喜

私は、ゆっくりと振り向いた。

そこにいたのは――

金色の髪、白い肌、そして、ピンク色の瞳の、青年だった。

その姿は以前とは違い、背はほとんど私と大差無いくらいまで成長してはいたが、それでも、あの優しげな顔は、忘れたことがない。

「……瀬夏？」

いつの間にか、私の声は涙声になっていた。

「はい。……お久しぶりですね、未来さん。」

清々しいほど綺麗な笑顔で、瀬夏は笑った。

「…瀬夏っ……。」

目から涙が溢れ、足の力が抜けてその場に膝をついた。

「未来さん、大丈夫ですか？」

瀬夏が走って私に近付く。

「瀬夏ーっ！」

思わず抱き着いた。

「わっ！？…あ、あの…。」

瀬夏はどうしたらいいのかわからず、困惑しているようだ。

「おかえりっ……瀬夏…。」

泣きながら、そう言った。

「…ただいま、未来さん。」

優しい声で、瀬夏も答えてくれた。

「……それにしても、背、随分伸びたね…。」
立ち上がり、改めて瀬夏を見る。

「私が今159だから…157くらい？」

「大体そのくらいですね。」

確か、天使は”愛”で成長するらしいから……。

「…私さ、瀬夏が家を出ていく前に、1度、頬にキスしたことがあるんだけど……もしかしてそれでここまで？」

「ある意味そうですね。」

「ほ、本当に!？」

「はい。向こうで何か嫌な事があった時は大体それを思い出して乗り切ってたんですけど、もしたらこうなりました。」

瀬夏は恥ずかしそうに答えた。

……そりゃ、私、瀬夏が家を出ていくまで1度も瀬夏の気持ちに気付かなかったからな…仕方ないと言えば仕方ないけど…。

「…何はともあれ、また会えて嬉しいですよ、未来さん。」

そして、こう続けた。

「僕がいない間に、随分と色々あったみたいですね。紅丞さんの事とか……。」

「えっ、どうして知ってるの？」

「実は、天界からずっと、未来さんの様子を見ていたんです。」

「ま、まさか、半年間ずっと？」

「はい。」

「……マジで？」

「マジです。」

な、何それ……プライベートもあったもんじゃない…。

「……あ、で、でも、お風呂とかは見てませんからね？」

「当たり前でしょっ、見ちゃまずいつつの。」

……じゃあ、夏子や、陸の事も解るの？」

「はい。赤崎夏子さんに、津谷陸さん、ですよ。あと、日比野綾子さんの事も。」

綾子の、事……。

「……あの、もしかして、触れちゃまずかったでしょうか……。」
「え？あ、いや、そう言う事じゃないんだけどね……もう瀬夏なら解つてると思うけど……聞いてくれるかな？」
「はい。」

私は、これまで起きたことを瀬夏に話した。

「食人鬼、ですか……すみません、やはり専門外ですね……。」
「そつか……やっぱりカラスを待つしかない、か……。」
「すみません、お役に立てなくて……。」
「いや、平気。瀬夏がいるだけでも、随分変わってくるから。おかげで、こうやって元気が出たんだから。」
「それなら、役に立てて嬉しいです。……それで、あの、未来さん。僕から1つ、伺ってもよろしいでしょうか？」
「何？」

「……僕、また未来さんの家に居候してもよろしいでしょうか？」

「私は大歓迎だけど……今、私の家はここじゃなくて、紅丞さんの家なんだよね……だから、紅丞さんから許可貰わないと無理かも……」

「そう、ですか……」

瀬夏表情が暗くなった。

「あ……安心して、瀬夏！私の完璧な話術で押し通して見せるし、それが無理ならごり押して方法もあるから……！」

瞬間、瀬夏が吹き出した。

「ご、ごり押して、それは駄目ですよ……あははは……」

「わ、私、本気なんだけど……」

そう言っても、瀬夏は笑いつばなしだった。

……なんとなく、綾子にマフラーをあげた夏子の気持ちがあったような気がする……。

歓喜（後書き）

先日、未来が夢に出てきました。内容を簡単に言うならば、「未来が瀬夏を探している場面」が夢に出てきました。もう私駄目だwwww

帰宅

「——というわけで、瀬夏が帰ってきたの！」

私は意気揚々と暁文に瀬夏を紹介（？）した。

あの後、とりあえず家に帰って話をしよう。と言うことになり、今に至る。

「噂をすれば陰がでる」ってことわざは本当なんだな……さっきまで瀬夏の話をしていたところだったんだ。」

「あ、それ、天界から聞いてました。……ついでに、暁文さんの吸血も、毎日かかさず見てましたよ。」

「え、マジで？」

「マジです。僕があれば注意したのに、暁文さんときたら——」
瀬夏の瞳が見る見る赤くなっていく。そして……

「——いい加減にしてください！！未来さんは道具じゃないんですよ！！？何度言ったら解るんですか！！？」

瀬夏が、怒鳴った。

瞬間、暁文の身体がビクツと強ばった。

「う、ごめん……。」

「僕じゃなく、未来さんに謝ってください……！」

「わ、わかったよ……本当、ごめん……未来。」

「い、いや、別に私は気にしてないからいいけど……。」
つか、本当に情けないな。25になって10歳以上も年下に説教されていとは。

しかし、瀬夏はしばらく会わないうちに大人になった。すぐ泣かな

くなつたみたいだし。

「瀬夏、私はもう大丈夫だから。」

とりあえず後ろから頭を撫でる。

「で、でも……。」

「……とにかく、瀬夏、おなか空いてない？」

「あ、空いています。」

「じゃあちよつと待ってて。何か作るから。」

とりあえずキッチンへと向かった――。

これから——その2（前書き）

作者も未来も暁文も迷走中

これからの事——その2

綾子の件があつてから、未来に元気がなかった。

そんな今、瀬夏が帰ってきた。これは何かの運命かもしれない。

「……瀬夏、ちょっといいか？」

とりあえず瀬夏を寝室へと招いた。

「暁文さん、どうしたんですか？」

「その……綾子の事、知ってるのか？」

「はい。見てましたから知ってます。先ほど未来さんからも聞きました。」

「じゃあその……食人鬼の事、何か解つたりしないか？」

「……すみません。未来さんにも訊かれたのですが、食人鬼は専門外なんです。」

「そうなのか……。」

「……ところで、暁文さん。」

「何だ？」

「その……未来さん、綾子さんの事で相当ショックを受けているよ……。」

「ああ、さつきも泣いてた。……信じられるか？あの未来が泣いてたんだぞ。」

「信じられませんよ。未来さんはそんな弱くないはずですし……でも、それ以上の”何か”があつたんでしょ？うね……。」

「……俺たちで何とか出来ないかな？」

「気持ちわかりますけど……これは、僕たちが関わっていい問題じゃないような気がします。」

「放っておけて言うのか？」

「そう言う訳じゃないんですけど、なんというか……これは、未来さ

んと綾子さん、そして綾子さんの中にいる食人鬼——椿さんの問題です。

僕たちは多分、今以上この問題に踏み込んだんじゃいけないような気がするんです。」

「……………わかった。」

「それにしても、驚きました。暁文さんも、人を思いやることがあるんですね。」

「皮肉のつもりか？」

言いながら、寝室の扉を開ける。

「別にそう言うつもりじゃ——」

なんて会話を交わしつつ、俺と瀬夏はリビングへと戻った。

葛藤

次の日も、綾子からは連絡は来なかった。

……なんか、逆に不安だ。今すぐ綾子の声が聞きたい。

朝、暁文に血を与え、寝室に行き、俺はとりあえず携帯から綾子に電話をかけた。

……… 出ない。

「綾子……。」

音沙汰なし。これ以上に不安な事はない。

会いに行くべきか？

でも、俺は昨日、綾子に拒絶された。

心が深く、傷ついた。

「ああー……。」

また涙が…。

「おい、未来。」

直後、暁文が寝室に入ってきた。

「——ってお前、また泣いてんのか。」

「え？……ああ、まあ…何の用？」

「用事話す前に、涙拭けよ。」

「いや、止まんないから垂れ流しでいいやと思って…。」

「お前…自暴自棄になりすぎ。」

暁文は自分の袖で丁寧な俺の涙を拭ってくれた。

「ん……ありがと。で、何の用…？」

「グレイが、お前に話したいことがあるって。」

「グレイが俺に？…なんだろ、カラスの事？」

「そうみたいだな——っていうかい加減泣き止めよ。」

袖で丁寧な涙を拭いながら、暁文は呆れたように答えた。

「…ごめん、俺、男の状態で泣いたことそんな無いから、どう泣き止んだらいいかわかんない。」

涙止まんねえ！。

「……つか、今まで言えなかったんだが、未来って男だと結構童顔

だよな。泣いてるのが絵になる。」

「それコンプレックスだから二度というな……。」

「いや、俺は童顔は結構タイプだぞ?」

「……は?」

驚きのあまり涙が止まった。

「何でもない。 그레이가待ってる、行くぞ。」

暁文はさっさと歩いて寢室を出てしまった。何なんだあいつ……。

葛藤（後書き）

暁文良くわからん

急展開？

「わああーっ！！」

寝室に行くと、 그레이が瀬夏を見て歓声を上げていた。

「 그레이さん、お久しぶりです。」

「久しぶりー！背、伸びたねー、僕あつという間に抜かされちゃったよー。」

그레이も、やっぱり瀬夏との再会は嬉しいようだ。

「……あ、未来ちゃん、やつほー。」

「おう。…で、話ってなんだ？」

「いや、話があるのは僕じゃなくて、カラスの方なんだ。」

そう言った瞬間、 그레이の背中から真つ黒な球体が飛び出した。

「「あっ！！」」

俺と瀬夏は同時に声を出した。

球体は 그레이の周りを何度か浮遊し、その隣で姿を変えた。

「1日ぶりだな、未来。」

カラスはニヤニヤしながらそう言うと、瀬夏の方を見た。

「そっちは……顔をみるのは初めてだな。」

「あ……はい。」

瀬夏は戸惑いながらも頷いた。

「そう固くなるなよ。俺は悪魔だ、敬語は必要ない。……で、未来。ちよつと事情が変わった。」

「え、どういうことだ？」

「2日間も時間はいらなかったってことだ。」

「……てことは、食人鬼の事、何か解ったってことか？」

「そう。だから、あの綾子って女呼んでくれないか？作戦会議がしたい。」

「ああ……。」

綾子は、今……。

「未来、どうしたんだ？」

カラスが俺の顔を覗いた。

「……ごめん、今、綾子と連絡が取れなくて……多分、明日学校には来ると思うから、その時にカラスの話、しておくよ。」

「あー……なるほどな。解ったよ。」

そう言うと、カラスは先ほどの球体になり、 그레이の背中へと戻って行ってしまった。

「……未来ちゃん、綾子ちゃんと喧嘩でもしたの？」

그레이が不安な表情を浮かべながら訊いてきた。

「ん、まあな……気にしないでくれ、些細な喧嘩だから。」

「それならいいけど……。」

とりあえず、進展はした。

後は、俺と綾子の問題だ。

登校

「忘れ物はないし、先生にも連絡したし……これでよし……っと。」

改めて気合を入れ直し、バッグの中身を再び確認して、寢室を出た。

「未来さん、何故、男の姿で学校に行くんですか？」

ソファに座っている瀬夏が話しかけてきた。

「何故って……別にいいじゃねえか。」

「だって、未来さん、学校の先生に”女子生徒のまま固定で”って言っただけでしょう？」

「え？…ああ、天界から見てたのか。…あえて理由をあげるなら、”気合が入るから”だな。」

「気合が…ですか。」

瀬夏、あまりピンと来てないようだ。

「女よりも男の方が気合が入るんだよ。ま、瀬夏には解らないだろうけどな。」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でながらそう言ってやった。

「わっ……やめてくださいよ、未来さん。」

両手で止められてしまった。

「ごめんごめん…じゃ、行ってくる。」

「行つてらっしゃい、未来さん。」

とりあえず玄関で再度気合を入れ直し、家を出た。

勝負

「安藤さん、おはようございます……………って、今日は男の姿で来たんですか？」

朝、夏子が話しかけてきた。

「おはよう、夏子。今日はずいぶん早いな。」

「そりゃあ、今日は私が日直ですから……………で、安藤さんはどうして今日は男の姿なんですか？」

「ちよつと事情があつてな……………今日はどうしても男じゃなきゃダメなんだ。」

「そう、なんですか……………先生に事情は話したんですか？」

「ああ。一応許可はもらつたから、大丈夫。」

……………まあ、たとえ許可もらえなくても、男の姿で行つてただろうがな。

綾子は、一応学校には来るだろう。来なくても、帰る途中に家に寄ればいいだけの話だ。

今日を逃せば、チャンスは無い。

離脱

綾子は、ホームルームが始まるギリギリの時間に教室に入った。――
――挨拶をする暇もなかった。

綾子の席は、俺の右斜め前。自分の席から綾子の様子を見ていたが、特に変な様子はなかった。元気がない表情を除けば、だが。

いつ話しかけようか、タイミングをはかっていた、1時間目――。

「あの…先生。」

静かな教室内で、突如、綾子が立ち上がり、手をあげた。

「気分が悪いんで、保健室行ってもいいですか？」

確かに、そう言ったのだ。

「じゃあ、誰か付き添った方がいいか？」

「あ、大丈夫です、1人でいけます。」

そう言うのと、綾子はさっさと教室を出て行ってしまった。

――
――今だ。

「先生、俺、ついていきます!!」

先生の返事も聞かず、俺は教室を飛び出した。

「綾子！」

綾子は、教室の近くの人気のない廊下のベンチに座っていた。

「…綾子、大丈夫か？」

俺の呼びかけに、綾子は首を左右に振った。

「……椿が、反応してる……」人間が沢山いる”って、喜んでるみたいなの……。」

疲れきった声で、そう言った。

「綾子……。」

ゆっくりと近寄る、だが――

「来ないでっ……！」

止められた。

「…お願い、今はそれ以上近寄らないで…傷つけたくない…」
胸を抑え、息を切らせながら、泣きそうな声で呟いた。

「綾子…でも——」

「未来、もう教室戻つたら？…先生に怒られるよ…？」
作り笑顔で笑いながら、そう言われた。

——こんな時でも、人の心配かよ。

「…解つた。」

——こっちがどれだけ心配してんのかも知らずに。

……言えなかった。綾子の状態を見て、言う気になれなかった。

俺は綾子に背を向け、教室へと戻って行つた。

物凄く、後悔している。

あの時、ちゃんと置いていけば、”あんなこと”にはならなかったはずなのに。

拒絶

昼休み。

綾子は、4時間目が終わっても、教室に帰ってこなかった。
それどころか――

「安藤さん、大変ですっ!!」

いつも冷静な夏子が、俺のところに走って来たのだ。

「夏子、どうしたんだ？」

夏子は慌ててこう言った。

「日比野さん……早退するって……。」

「……え？」

早退――早く、帰る事。

瞬間、俺は走り出した。

階段を駆け下り、無我夢中で走った。

学校を出て、地下鉄ではなく、別の方向の道へと向かった。――
何故かこういう時に限って、変に勘が鋭くなる。

道中、携帯が落ちているのが目に入った。

「これ……綾子の……。」

やっぱりこっちの道で間違いないようだ。
とりあえず携帯を制服のポケットに入れ、綾子を探す。

近くの道の角を曲がったところに、綾子はいた。

「綾子!!」

呼びかけると、綾子は驚いた表情で振り返った。

「未来っ……。」

「……綾子、早退するなんて、何考えてんだよ。」
距離をとって、話をする。

「……だって、椿が……。」
「それがなんだよ、椿は綾子には逆らえないんだ。襲うことはあつたとしても、食うことなんて無いって――」

「もう放つといて……！」

辺りが、水を打ったように静かになった。

「……気持ちは嬉しいよ……でも、もう私1人の力じゃ抑えきれないの……誰かを傷つけるのは嫌なの……。」

そして――

「だから、もう、私には関わらないで……。」

ハッキリと、俺の目を見ながら、そう言った。

直後、綾子は走って俺の前から消えた。

今度こそ、本当に――拒絶された。

目の前が、真っ暗になった。

拒絶（後書き）

作者はこついうのを書いてるだけで泣けてきます。

絶望と癒し

その後、どのように学校に帰り、どうやって家まで帰ったか、覚えていない。

家まで帰り、瀬夏の出迎えもろくに受けず、俺は寝室に直行した。

部屋に入り、ベッドに飛び込む。

「綾子……………」

ああ、駄目だ、涙が…抑えきれない……。

すると、携帯のバイブが聞こえた。

ディスプレイには、”佐川紅丞”と表示されていた。

慌てて、ごしごしと涙を拭う。——これでいいのかわからない。

「も…もしもし？」

「未来？…俺だけど。」

「ディスプレイに表示されてたから解りますよ…。」

「そ、そうか…：…なあ、今から、会えないか？」

「え？…すみません、2日間ですので、明日にならなきゃ…。」

「それが、俺今、未来の家の前にいるんだ。」

「…：…え？…紅丞さん、メリーさんの真似ですか？」

「そんなことしないよ。」

「じゃありかちゃんの真似ですか？」

「だから違うって。ちよつと話があるんだ、開けてくれないか？」

「…：…わかりました。じゃあ一度、電話切りますね。」

電話を切り、寢室を出る。

「…：…未来さん、何かあったんですか？」

瀬夏が心配そうな表情で俺を見ている。

「ああ…後で話すよ。今、紅丞さんが来てるんだ。」

そう言い残し、玄関へと向かう。

覗き穴を覗くと、確かに紅丞さんがいた。

「…：…我慢できなかったんですか？」

言いながら扉を開ける。

「いや、別にそう言うわけじゃないんだけど……入ってもいいか？」
「どうぞ。」

とりあえず寝室へと通す。

「……それで、今日はどうしたんですか？」

「実はさ……日比野の事、聞いたんだ。」

「……え？」
何を言っているのか、解らなかった。

「いや、だから、食人鬼の事、聞いたんだよ。」

「……誰からですか？」

「グレイから。」

グレイ……余計な事を……。

「……いや、グレイから”聞いた”って言うか、俺がグレイに”尋問して聞き出した”感じたな。」

「え……なんで、そこまでしたんですか？」

「なんでって……お前の事が心配だからに決まってるんだろ。」

言葉が、出なかった。

「…確かにさ、俺、情けないから、未来にとっては相談すべき対象では無いのかもしれないけど、わざわざ制限かける必要は無かったんじゃないの？」

「そ、それは——」

「もしかして俺、邪魔なのか？」

否定の意味を込めて、首を左右に振る。

「そんなことないですっ…ただ、紅丞さんを巻き込むわけにはいかないと思って……受験生だし…。」

「確かにそうだけどさ…俺、未来にとつての”癒し”であり続けたいんだ。例え未来がそう思ってたなくても…だから、意味は無くても、言うだけ言ってみてくれないか？恋人なんだし…。」

……考えられない。

今まで、こういうこという人だったか？

意外と、優しくったんだな…紅丞さんって…。

「…ありがとうございます…。」

涙が溢れた。——さっき拭いたはずなのに。

堪らず、抱き着いた。男同士とかそう言うのは考えなかった。

「俺、わからないんです……友人にやってることが本当に正しいのか……解らないんです……。」

思ったことを、全てぶつけた。支離滅裂だったけど。

紅丞さんはその間ずっと、俺の背中を撫で続けてくれた——。

起死回生

俺は、馬鹿だった。

綾子を手けるつもりが、返り討ちにあって、結果、自分が被害者面していた。

泣き止んだ俺は、とりあえず瀬夏と紅丞さんに、今まであったことと、今日あったことを伝えた。

……途中、何度も思いだし泣きしてしまい、その度^{たび}に紅丞さんと瀬夏に宥められてしまつて、最後の方は嗚咽混じりになつてしまつた。
…情けないな、俺。

「……そうだったのか…。」

「それは……大変でしたね…。」

紅丞さんと瀬夏は、一応共感はしてくれらしく、何度も頷いてくれた。

「……でも、それだったら、日比野もヤバいんじゃないのか？」

紅丞さんの、そんな一言から、始まつた。

「確かに……食人鬼の所為で、綾子さん、随分と追いつめられてるみたいですし……綾子さんから、何か聞いてないんですか？」
「……それが、会うことはもちろん、メールも電話も出来ない状態で……」

……って、待てよ？メール？

おもむろにポケットに手を入れる。

「……あ。」

「未来、どうしたんだ？」

「未来さん、どうかしました？」

瀬夏と紅丞さんが俺を見る。

ゆつくりと、ポケットの中のものを取り出す。

それは――

携帯電話。

黄緑色の、折りたたみ式の最新機種だ。

「……未来、それ、誰のだ？」
「綾子のです。」

「「えっ!？」」

2人は同時に声を上げた。

「な、なんで未来さんがそれを……?」

「さつき、綾子を追いかけてる時に拾ったんだよ。」

3人で携帯を見つめる。

「……なあ、これ、何か手掛かりあるんじゃないか?」

突如、紅丞さんがそう言った。

「え?……紅丞さん、それは駄目ですよ。」

瀬夏がすかさず注意する。

「いや、でも、何か解るかも知れないじゃないか?」

「そうかもしれないが——あっ!」

瀬夏が紅丞さんと話し合ってる間に、俺は綾子の携帯を開いた。

そこには——

メモが残されていた。

何かのメモを写真に撮って、待ち受けにしていたようだ。

……それにしても……。

「何だろう、このメモ……。」

「何が、書いてあるんだ?」

そこには、日時、場所、そして、屋上、と記されていた。場所はちやうど紅丞さんの家の近くにあるビルを指している。

メモを見た瞬間、瀬夏の顔が青ざめた。

「瀬夏？どうしたんだ？」

「み、未来さん！これ——」

そして、こう言った。

「綾子さん、死ぬ気なんじゃないんですか！？」

辺りが一気に凍り付いたかのように感じられた。

確かに、日時、場所、屋上……まさか、綾子は本当に——

「おい、未来、ヤバいんじゃないのか!？」

「瀬夏っ! 今、何時だ!？」

「だ、だいたい6時半くらいです!」

メモに記された日時は、今日の午後7時半……今から行けばギリギリ間に合う!

俺は走り出した。必要最低限の物を持って、家を飛び出した――。

涙

地下鉄を利用し、なんとか7時にビル近くに到着した。

「……ここだ……。」

たどり着いたビルは、近所では結構有名で、近々取り壊されると聞いている。

中に人はおらず、扉を引くと案の定開いた。綾子はここにいる。

「綾子っ！！」

屋上につく頃には、7時15分になっていた。

綾子は、数メートル先の、屋上の柵に寄りかかっていた。

「……………未来？」

俺の気配に気付き、振り向く。

その顔は、やつれていて、夕食どころか昼食も食べていない様子が

うかがえる。顔色も悪く、昼間の綾子とは別人に見えた。

「……どうしてここが解ったの……？」

かすれた声で、訊かれた。

「……これ。」

俺はゆっくりと、綾子の携帯電話を差し出した。

「ああ……落としたと思ったら、未来が持ってたんだ……。」

寂しげに、笑った。

「……返してやるから、一緒に帰ろう。」

俺の言葉に、綾子はゆっくりと首を振った。

「……帰りたくない。その携帯も、もう必要ない……。」「
そして、再び俺に背を向けた。」

「馬鹿なことしてんじゃねえよっ……！！」

「馬鹿だなんて心外だよ……ちゃんと時間とか事前に確認したんだから。この時間帯は人の通りが少ないから飛び降りても周りに迷惑かからないって。」

「っ……そういう問題じゃねえ……！！」

思わず、怒鳴った。

「……何で、怒ってるの？」

綾子は再び振り向き、

「私、もう関わらないでって言ったよね？」

冷徹な口調で、

「だからさ、もう帰って。」

言い放った。

「なんで…そこまでして、俺を遠ざけるんだ…？」
俯きながら聞く。

「……これは私の善意なんだよ？」 未来を傷つけない” っていう私の
——」

「もう傷ついてるよ！…！」

綾子の言葉が止まった。

顔を上げて、綾子を見る。——駄目だ、抑えられない。

「お前に拒絶されて……散々傷ついたよ……。」

視界がどんどんぼやけていく。

「俺、お前のこと本当に心配してんのにさ……。」

声が涙声になっていく。

「……そんなに、俺の事、嫌いなのか……？」

涙が、溢れた。

「……ごめんね、未来。今日で全部、終わりだから。」
そう言つと、綾子は素早く柵を乗り越えた。

「綾子、待ってくれ、やめてくれ、綾子っ!!」
近付こうとしても、足が竦んで動かない。

「じゃあね、未来。」

綾子の身体が、

そして、

宙を舞った。

綾子

私は、昔から変わった子供だと言われた。

人とは違う価値観を持っている所為で、小学校の先生とかに、「綾子ちゃんは変わってるね!。」と言われた。

だから、普通になろうとした。

子供なりに、普通になりたいと思った。

そんな私が10歳の頃見た夢。

食人鬼が、私の身体に入る夢。

7年後、食人鬼が覚醒するという、宣告。

逃げたくなるような現実を突きつけられた。

誰にも、相談できなかった。

私は元々普通じゃない。普通になんてなれない。

普通って、何だろう？

MVPにご褒美

バサッ

羽音が、聞こえた。

「未来さん!!」

聞き慣れた声。そして――

「綾子さんなら、無事ですょ!!」

そう、聞こえた。

ゆつくりと、俯いていた顔を上げる。

瀬夏が、器用に羽を使って宙に浮いていた。

その腕には――

綾子が抱きかかえられていた。

「――っ!!」

再び視界がぼやけ、涙が溢れる。

瀬夏はゆっくりと俺の目の前に立ち、綾子を降ろした。

「綾子っ……。」

気を失ってはいるが、生きている。

「ありがとう、瀬夏……。」

「いえ、僕はただ、当然の事をしたまですよ。」

「今回の騒動、MVPを決めるとしたら、間違いなく瀬夏だな……。」

「

「僕は未来さんだと思いますよ?……拒絶されつつも果敢に説得しようとするその姿、感動しました。」

「馬鹿にしてんのか?」

涙を拭きながらそう言う。

「あっ、いやっ、そういつつもりじゃ――」

「まあいいや……とにかく、綾子を連れてここから離れよう。」

——というわけで、今、私と瀬夏と綾子は紅丞さんの家にいる。
制限をかける必要が無くなったので、帰ってきた。
先に暁文（もう帰ってたらしい）に血をあげておき、綾子が起きる
までそばにすることにした。

私が使っているベッドに横たわる綾子を見る。
顔色が悪いのは相変わらずだが、1つ気付いたことがある。

それが——涙の痕。

あの時の私は、涙で視界がぼやけてよく見えてなかったが……綾子
も、泣いていたらしい。

「綾子……。」
そつと頭を撫でる。

綾子が助かってよかったと言う喜びと、また拒絶されてしまうのではないかと言う恐怖、そして、こんな時に出て来ない椿に対する怒りが混ざり、何だが変な気分だ。

「未来さん。」

ふと聞こえた声に振り向くと、背後に瀬夏がいた。……気付かなかった。

「綾子さん、まだ目が覚めないんですか？」

「うん……。」

「根気強く待つしかないですね……。」

「そうだね……あ、そうだ、瀬夏。」

「何でしょう？」

瀬夏がこっちを見た。——今だ。

私は素早く立ち上がり、瀬夏の顎を持ち上げ、唇にキスをした。

「んっ!？」

触れるだけのキス。

5秒くらい経ってから、ゆっくりと離れた。

「あっ……。」

瀬夏は驚きのあまり、顔を真っ赤にして口をパクパク動かしていた。
「綾子を助けてくれたご褒美。みんなには内緒だよ。」

口の前に人差し指を立て、ウインクしながら言ってやった。

MVPにご褒美（後書き）

ミンナニハ ナイショダヨ

再び

ここ、どこだろう……？

確か、私、屋上から飛び降りて、それから……。……思い出せない。それから、何だっけ？

「んっ……。」

ゆっくりと目を開ける。

「綾子っ！」

目の前には、未来と、金髪的美青年がいた。

「……未来、私、生きてるの……？」

私の質問に、未来は頷いた。

——失敗したんだ。

でも、何で？ちゃんと飛び降りたはず……。……

「綾子さん。」

突如、金髪的美青年が話しかけてきた。

「あなたは……誰？」

「初めまして、月見瀬夏と申します。……あなたを助けた張本人です。」

私を助けた……張本人。

「……どうして私を助けたの？」

「未来さんのご友人だからです。」

「それだけで、私を……？」

美青年——瀬夏君は小さく頷いた。

「瀬夏、あとはもういいから、私と綾子、2人きりにしてくれない？」

未来が素早く指示を出した。

「あ、解りました。」

瀬夏君は早歩きで部屋を出て行ってしまった。

広い部屋で、2人きり。

「……ここ、どこ？」

起き上り、辺りを見渡す。

「紅丞さんの家。」

紅丞”先輩”ではなく、紅丞”さん”……隠す必要はないと感じたらしい。

「そうなんだ……帰っていい？」

「駄目。」

「え？」

直後、未来はいきなりこう言った。

「椿を出して。2人だけで話がしたい。」

そう言いながら、私の右手に触れた。

徐々に身体が熱くなる。

「嫌っ…離して…。」

振りほどこうとするが、力が強すぎて振りほどけない。

「椿、聞こえてるでしょ？早く出てきて。頼みたいことがある。」

未来が、物凄く真剣な目で私を見ている。

「未来、何言ってるの？私、今日一日何も食べてないんだよ？…そんな時に椿を呼んだら…解ってるでしょ？」

心拍数が上昇する。息が詰まっていく。

「…ねえ、手、離してよ…お願い…。」

そして――

「っ……っわああああああっ！……！」

頭が急に痛くなる。身体の主導権が奪われた。

「……………」

椿は、妬むような、欲望に満ちた目で未来を見た。

「貴様っ……………！」

未来の手を振りほどき、掴み掛ろとするが――

直後、短い角を未来に掴まれ、怯む。

「なっ……………!? は、離せっ……！」

未来の腕を掴み、離そうとするが、力が弱いため、離れない。

「へえ……………カラスの言った通りだ……角、弱いんだ……………」

未来がそんなことを呟いているが、椿には聞こえていない。

「貴様、何の真似だ……！ さっさと離せ……！」

「嫌……………ちよつと頼みたいことがあるんだけど……………」

「……食人鬼相手に頼みごとか？ 調子に乗るのもいい加減に……………」

「でもさ、ちよつと綾子に聞かれたくないからさ……………どうにかかない？」

未来は物凄く冷やかな目で椿を見つめる。

……………っていうか、聞かれたくないことって何？

「……………」

椿はゆつくりとこめかみの辺りに指を置き、何かを唱えた。

直後、私の意識が途絶えた。

頼みごと

「……これでよし、と。」

椿はゆつくりと手を降ろした。

「何したの？」

「主の意識を一時的に飛ばした。これで2人きりだ。」

「……本当に？」

「私は嘘が嫌いだ。」

てことは、本当か。

私はそーっと角から手を離れた。

「……で、頼みごととはなんだ。さつさと言え、食うぞ。」

「脅しになってない。…あのさ、綾子が屋上にいる時、あんた何してたの？」

「私は……主に抑えつけられてて、身動きが取れなかった。」

「抑えつけられてるって、どういう意味？」

「そのままの意味だ。一言しゃべればすぐ遮られ、私と会話すらしてくれなかった。」

1人で屋上にいる時も、必死で呼びかけたが、聞きいれてくれず、出て行こうとすれば自身の身体を傷つけていたため、出ていくことができなかった。これが証拠だ。」

椿は勢いよく腕をまくった。

そこには、無数の引つ掻き傷のようなものがあつた。——その数は、以前にもまして増えているように思えた。

「主は本気で私の事が嫌いなようだ……ここまでするなんて、思わなかった。」

傷だらけの腕を撫でながら、椿は悲しそうに呟いた。

「…頼みごとというのは、これで終わりか？」

「いや、別に……。」

言おうとしたが、止まってしまった。——何とかして言わないと。

「……終わりなら、私はもう引っ込むが——」

「ま、待つて！」

手を掴んで止めた。

「…そつか、椿でも、止められなかったんだ…。頼みごとって言うのはその……綾子の事なんだけど……。」

「……もしや、私に主の自殺をやめさせるとでもいうのか？それなら無理だな。」

「無理つて……綾子が死んだら、あんたも無事じゃすまないんでしょ？」

「そりやあな。主と私は一心同体だ。」

「嫌じゃないの？」

「そりやあ確かに嫌だが…主はもう限界だ。私が覚醒したことによつてこうなるとまでは思わなかった。今回は予想外な事が多すぎる。」

「

「大体予想ついてたでしょ……人間が食人鬼になるんだよ？わからなかったの？」

椿は大きく頷いた。……こいつ、作者と同じくらい無能だ。つか、馬鹿だ。

「はああ……。」

「なんだその溜息は。私にだって予想外なことぐらいある。」

「あつてもおかしくないけど……もういいや。」

とりあえず本題へ戻る。

「…で、頼みたいことつて言うのは…もうわかつてるとは思っけど、綾子の自殺を止めてもらいたい。」

「だから、それは無理だと言ってるだろう。」

「解つてる。私も協力するから。っていうか、あんたが協力してく

ればいいから。」

「私が協力？お前にか？」

「そう。……てかさ——いい加減名前と呼んでよ。さつきから”貴様”とか”お前”とかばっかりじゃない。」

「ふん、人間を名前で呼ぶなど、最初からしない主義だ。」

……呆れた。ここまで来ておいて。

「……そもそも、主の自殺を止めたいのなら、まず主を説得してみればいいのではないか？話はそれからだろう？」

「そうかもしれないけど、その自殺の原因があんたなんだから、まず根源からどうにかしないとイケないと思わないの？」

「それができたら苦労しない。」

……ふて腐れてやがる。

「じゃあせめて、綾子何か危ない事しそうになったらすぐ呼びかけてよ。遮られても根気強く。」

「そうは言うが、主がまた次の手を考えるかもしれないぞ？今日だつて何も口にしていない。餓死を狙っている可能性もある。」

「じゃあ、もしも綾子がそっちの方で危なくなったら——」

私は椿に向けて、自分の指先を見せるように腕を伸ばした。

「その時は、私を食べればいいから。」

言い放った。

「……本気か？だつて、お前は——」

椿が、言いかけて、止まった。

ゆつくりと、拳げていた腕を降ろす。

「私はいつだつて本気だよ。綾子のためならなんだつてする。死ん

だつてかまわない。」

「お前つ……。」

「この話はこれで終了。綾子と替ってくれる？」

「……解つた。」

椿は私から顔を逸らし、ベッドに横になると、目を瞑つた。

「まさか、ここまで主の事心配してくれる人間がいたとは、思わなかつた……。」

そして――

「……ありがとう、未来。」

そう、呟いた。

「え？」

聞き返す前に、椿は既に綾子に替わっていた。

仲直り

「ごめんなさいっ!!!!」

気が付いて早々、いきなり綾子が謝って来た。

「え!?!ちよ、何でいきなり!?!」

「だって、未来がこんなに心配してくれてたのに、私……。」

どうやら、ようやく自分が仕出かしたことに気が付いたらしい。

「……綾子、さっき瀬夏が言ってたんだけど……携帯、わざと落としたって本当?」

瀬夏曰く、”携帯を落としたにしては、傷1つついていないのは変だ。”という事で、わざとその場に置いたのではないのか?と判断したそうだ。

「え?……ああ……うん。」

綾子は小さく頷いた。

「……助けてほしいのなら、最初からそう言えばいいのに。」

「ごめん……なんか、途中から意地はっちゃって……ねえ、未来。」

「何?」

「未来の事、拒絶したりして……本当にごめんなさい。……これから
も、友達で居続けてくれる……?」

「もちろん。」

私は右手を差し出した。

「…ありがとう。」

綾子も右手を差し出し、固い握手を交わした。

「……ところで、未来。」

「何？」

「お腹空いた…。」

「…そう言うと思った。ちよつと待ってて。」

部屋を出て、キッチンへと向かった――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3651ba/>

性别人間と食人鬼

2012年1月12日19時56分発行